● 研究室紹介

福山大学工学部土木工学科
計画系研究室

三輪　利英
井上　矩之

はじめに

福山大学は，昭和50年4月開学の新しい大学であるが，現在では3学部（経済・工・薬）10学科，大学院2研究科（工・薬）をもつ，学生総数約4500人の総合大学に発展している．土木工学科の学生数は，学部約340人，大学院約10人，教員数は16名で，一人当たり学生数22人は，私立大学の中では少人数教育を誇り得ると自負している．

計画系研究室

スタッフは三輪利英教授，井上矩之教授の2名．三輪は大阪市を退職して昭和57年4月に，井上は京都大学を退職して昭和63年4月に赴任．それぞれ，開学直後の昭和52年より計画系研究室の充実に苦労された，米谷榮二，近藤勝直元教授の退職された後をうけて就任した．この2人で，大学院生3名，卒業研究の学部4年生10名を指導している．

研究活動

三輪は京都市の出身．小学校から大学までずっと京都で学ぶ．図学に興味があって大学は建築と思ったが，デッサンが必修ときいて土木を選ぶ．鉄道に関心があって国鉄を希望したが縁なく振られ，土木教室（鉄道工学）に助手として3年間の研究生活を送る．この頃抵抗線ひずみ計を後藤尚男先生と自作して軌道応力理論と測定に明け暮れた若かりし頃を思い出す．鉄道の夢捨てがたく，大阪市交通局を選び，20年，地下鉄の建設に従事，あと10年ほど大阪市の基本構想づくりに携わる．昭和57年，福山大学に着任．都市景観評価に関する方法論的研究を京都大学 天野教授の指導の下で行い，目下コンピュータグラフィックスを使って，実務に関係のある大阪阿倍野再開発地区での街路景観に実践中である．CGを使った交差点内における街路照明のあり方についても基礎的調査研究中である．河川景観については，住民の河川に対するアンケート調査の結果から，数量化理論を採用しつつ，河川景観構成要素の抽出を試みようとするものである．景観という抽象的な対象を定量的に求め，実務に利用したいと考えながら，はや10年が過ぎたが，はたしてこれからどこまでこの不可思議な景観の本質についてアプローチができるか，悩みは尽きることはない．

井上は三重県の出身，中学生時代に遭遇した伊勢湾台風の恐怖が決定的動機となり，治水技術者をめざす．大学院に進学時に，佐佐木綱先生から，「井上君，これからは道路に車の洪水が起こります，車の治水の研究をしませんか」と誘われ，京都大学退職まで約20年間，米谷・佐佐木研究室で，高速道路の交通制御の研究一筋に励む．地方都市である福山に来て，大都市の渋滞対策というテーマも長年の愛着があるが，それよりも，福山や備後やさらに中国地方の発展につながるもっと身近な研究に力を入れたいと思うようになった．地域に密着した研究をして，歴史の浅い福山大学がこの地方の人々に愛されるようになるのに，少しでも貢献できれば大変嬉しいことである．また，井上は歴史が大好きである．工事用ダンプカー通行の大原の文化的価値に対する影響評価（昭和62年度土木学会全国大会），精神的落ち着きを与える沿道景観の設計（阪神高速道路公団25周年記念論文集，昭和62年），ばらに潜む潜在意識の解消（商工ふくやま，昭和63年），鞆の琴形橋（平成元年度土木学会中四支部）など歴史に関連した論文・随筆を最近発表．歴史と地域計画の触れ合う辺りを進んで行きたいと考えている．

おわりに

女子学生数は全学で約650人（約15％）いるが，将来この割合を飛躍的に向上させるべく，全学レベルで検討が行われ始めた．土木工学科は現在1名在学しているだけで，10学科中最低である．それだけに，女子学生に抵抗感の比較的少ない計画系研究室の果たすべき役割は重大で，特色ある教育・研究を行って，土木工学と福山大学の発展に貢献したい．